断簡一

この小説は誰にも読まれない。

こういう書き方は人を不快にさせる。感傷に過ぎないからだ。むろん誰かに読まれたいのだ。悲観的な気持ちになったとき、人はこういうものの言い方をするものである。読んでもらうために書かれていないから仕方ないとも言えるが、だからと言ってそういうふうに書いても読んでもらえるとは限らない。それでどうにかなるくらいなら作家志望の人々の苦労はない。

取り敢えず何を言っても仕方ない。独り言に過ぎない。ただ自分の気晴らしのため、いつか読んでもらえるかもという微かな希いのため、記憶を補うために、ただ書く。

激しい雨だった。

先程自分の足下を濡らしていた雨水の泥の水溜りが今、眼の高さにある。この不思議な感覚。兵隊たちが歩くブーツがときどき泥を撥ねる。さっきまで自分もそうやって行軍していた。ようやく食事も終えてこうして横たわっている。防水シートにビニール屋根が附いたような軽量簡易テントで、坐れるほどの高さもなく、少し広い寝袋のようなものだ。

小窓が附いていて、そこから外を確認できる。ランプに照らされる銀の雨の滴を、水溜りを、山岳地帯の泥を、自分が身を寄せる岩のほんの一部分の凹凸を、その隙間に生える雑草を、地を歩く虫けらの眼の位置で眺めているのだ。当然、撥ねた飛沫が顔にかかるときもある。

何かもの悲しい、懐かしい、素に帰ったような、個室便所に入ったときのように解放された気分だ。何かすべて捨てて本当のありのままの等身大の自分であることを許された瞬間のような気持ちだった。

疲れ切っていた。

長い距離、天候も悪く、足場も悪く、斜面の嶮しい行程だった。自分より先に着いて食事を始めていた者もいればそれを済ませて寝ている者もいた。今は自分もようやく靴下を脱いで足を乾かし、寝ようとしている。だが外では到着した者もいれば、食事を始める者もいるし、又寝袋を敷く者もいる。

何でこんなことをしているのだろう。

どうせ死ぬのに。何のために戦っているのか。死を怖れながら。誰かのためにか。だが何のために。死に瀕し、死の淵に堕ちて行くとき、そこには誰も立ち入れない。親や兄弟ですらそこには来てくれない。独りで暗い場所に吸い込まれ、誰からも閉ざされてしまう。その先にはもう何もない。無すらもない。何の意地を張る必要があるのか。

いや、そんなことはない。生命とは……そういう反駁は聞き飽きた。それは生きていられて、意地がまだあるから言えるのだ。生命があって自尊心が健在だから言えるのだ。そういう見栄が全部無みされてしまって何処にも根性を張る足場がなくなってしまったとき、すべてが虚妄に過ぎなかったと感じられ、愕然とする。

だがこんなこと考えて何になるだろう。